

## ◎計画の一部変更による環境影響の変化の見込みとその対応（概要）

### 【工事中】

#### ○資材運搬車両等の走行に係る大気質、騒音・振動に及ぼす影響

・評価書における工事中最盛時期について、平成 26 年度が平成 30 年度頃になることから、河原インター山手工業団地関連の車両台数を含む将来一般交通量は、評価書に記載した台数と比較して増加する。

⇒本事業の資材運搬車両の走行に伴う環境影響には変更がないものの、将来一般交通量等の増加に伴い、車両全体の走行に伴う排ガスの影響は、評価書の内容と比較して変化する可能性がある。



計画に変更はないものの、周辺環境の変化に伴い、環境影響が評価書の内容から変化する可能性があるため、影響を検証します。

#### ○造成工事に係る大気質、水質等、地形・地質に及ぼす影響

・処理方式の決定や搬入計画が一部変更となるものの、主な土地利用計画や緑化計画のほか、造成工事計画の内容に変更はない。

⇒粉じんの発生量、濁水の発生量、造成工事による切土量は評価書に記載の内容と変更はない。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して変化がないと見込まれます。

#### ○造成工事に係る植物、動物、水生生物、生態系に及ぼす影響

・処理方式の決定や搬入計画が一部変更となるものの、主な土地利用計画や緑化計画、造成工事計画の内容に変更はない。

⇒【植物】保全すべき対象について適切な代替地を設けて移植を行う等の環境保全措置についても変更はない。

⇒【動物】移植やビオトープ等を整備する等の環境保全措置及び濁水防止対策の内容にも変更はない。

⇒【水生生物】本事業の施工時に確認された水生生物については、付近のため池に移植を行う等の環境保全措置の内容についても変更はない。

⇒【生態系】フクロウの分布状況、フクロウの餌環境、モリアオガエルの生息環境への影響に変化はなく、モリアオガエル、タゴガエルの産卵環境についても変化はない。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して変化がないと見込まれます。

○建設機械稼働に係る騒音・振動、動物に及ぼす影響

・処理方式を「ストーカー方式」に決定。

⇒〔騒音・振動〕評価書の予測評価に用いた3方式のうち建物規模が最大となる「ストーカー+灰溶融方式」と比較すると、建物規模は小さくなるため、建設機械稼働に伴う騒音・振動の影響は、評価書内容と比較して小さくなる。

⇒〔動物〕建設機械稼働に伴う騒音振動が注目すべき種（ほ乳類、鳥類）の生息状況に与える影響は、評価書の内容と比較して小さくなる。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して小さくなると見込まれます。

○資材運搬車両等の走行に係る触れ合い活動の場に及ぼす影響

・処理方式の決定や搬入計画が一部変更となる。

⇒資材運搬車両等の走行に伴う環境影響には変化はない。

⇒主要な触れ合い活動の場へのアクセスルートとした鳥取自動車道の交通量についても最新のデータを採用。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して変化がないと見込まれます。

## 【供用時】

### ○廃棄物運搬車両等の走行に係る大気質、騒音・振動及び触れ合い活動の場に及ぼす影響

・搬入計画（搬出入車両台数計画）については、平成 26 年度の圏域内の廃棄物搬入実績をベースに見直しを行ったことに伴い、廃棄物運搬車両台数は、評価書に記載した台数と比較して増加する。

⇒廃棄物運搬車両等の走行に伴う環境影響は、評価書の内容と比較して変化する。



計画の変更により環境影響が、評価書の内容から変化するため、影響を検証します。

### ○煙突排ガスに係る大気質、悪臭及び土壌に及ぼす影響

・処理方式を「ストーカ方式」に決定。

⇒評価書の予測評価に用いた 3 方式のうち排ガス量が最大となる「ストーカ+灰溶融方式」と比較すると、煙突排ガスによる環境影響は小さくなる。



煙突排ガスに伴う大気質に係る影響、悪臭に係る影響（最大着着地濃度地点における臭気指数）、土壌に係る影響（土壌中ダイオキシン類に係る影響）は、評価書の内容と比較して小さくなると見込まれます。

### ○施設の稼働に係る騒音・振動、悪臭（臭気の漏えい）、動物、廃棄物等の影響

・処理方式を「ストーカ方式」に決定。

⇒〔騒音・振動〕評価書の予測評価に用いた 3 方式のうち建物規模が最大となる「ストーカ+灰溶融方式」と比較すると、設備機器の規模は小さくなる。

⇒〔悪臭〕臭気の漏えいについては、計画建物の面積が小さくなることにより、建物と敷地境界までの離隔がより確保される。

⇒〔動物〕設備機器及び計画建物の面積が小規模化することで建物と敷地境界までの離隔がより確保されることから、施設の稼働に伴う騒音振動の影響は小さくなる。

⇒〔廃棄物等〕評価書の予測評価に用いた 3 方式のうち廃棄物発生量が最大となる「ガス化溶融方式」と比較すると、施設の稼働に伴う廃棄物発生による影響は、評価書の内容と比較して小さくなる。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して小さくなると見込まれます。

#### ○施設の稼働に係る水質等、水生生物の影響

・処理方式を「ストーカ方式」に決定。

⇒主な土地利用計画や緑化計画、用排水計画、水処理の内容にも変更はないことから、排水量及び水質は、評価書に記載した内容と変更はない。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して変化がないと見込まれます。

#### ○施設の存在に係る生態系に及ぼす影響

・処理方式の決定や搬入計画が一部変更となる。

⇒生態系については、主な土地利用計画や緑化計画のほか、ホンドリカの移動経路も変わらないため、評価書の内容と比較して同等になる。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して変化がないと見込まれます。

#### ○施設の存在に係る景観に及ぼす影響

・処理方式を「ストーカ方式」に決定。

⇒景観については、評価書の予測評価に用いた3方式のうち建物規模が最大となる「ストーカ+灰溶解方式」と比較すると、建物規模は小さくなる。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して小さくなると見込まれます。

#### ○施設の稼働に係る温室効果ガスに及ぼす影響

〔第1回変更届〕

・施設規模が270 t/日から240 t/日になることにより計画施設から排出される温室効果ガスは評価書内容と比較して年間で数千トン減少すると考えられるいっぽうで、発電により削減できる二酸化炭素量については数百トン程度減少すると見込んでいた。

・処理方式の違いによる温室効果ガス排出量の変化はほとんどなく、施設の設備機器は省エネルギー型の採用に努めるなどの環境保全措置の内容について変更はないことから、温室効果ガス発生による影響は、評価書内容と比較して同等またはそれ以下になるものと想定していた。

〔本変更届〕

・処理方式が「ストーカ方式」に決定。

⇒処理方式の違いによる温室効果ガス排出量の変化はほとんどなく、予測評価については売電量（温室効果ガス削減量）が最も小さい「ガス化溶解方式」で行っている。



計画の一部変更により環境影響が評価書の内容と比較して小さくなると見込まれます。